



Hondaは「喜び」を 創造する企業でありたい

本田技研工業株式会社
代表取締役社長

福井 威夫

創業以来、Hondaが掲げる企業理念に「人間尊重」と「三つの喜び」があります。言い換えると「人間主体」であり、「お客様本位」ということにあります。

Hondaは、「人間尊重」に基づいてすべての人一人ひとりと、「喜び」を共にわかちあえる信頼関係を築いていきたいと望んでおり、企業活動を通じて、商品を買ってくださる人（買う喜び）、商品の販売・サービスに携わる人（売る喜び）、商品を生み出すことに携わる人（創る喜び）の「三つの喜び」を誠実に追求し、実現することで社会からの信頼を得ることができると考えています。

「三つの喜び」は、「買う喜び」が原点です。商品やサービスを通じてお客様一人ひとりに満足のみならず、共感や感動を覚えていただくことが、企業活動に価値を与え、そのことでわたしたちは、「創り」「売る」ことに真の喜びを得ることができます。そのために、わたしたちは、お客様の期待を上回る新しい価値の商品を創りだすとともに、心をこめたサービスでお客様の生涯に亘って満足を高めていく「ライフタイム・オーナーシップ・ロイヤリティ」の向上に努めています。車は若い時から熟年になるまで乗り継いでいくものです。お客様の期待や要望も、時代によって大きく変化していきます。その時代性や世相に基づく変化を、細かいところまで見失わずに、長い年月に亘ってHonda車を愛用して喜んでいただき、お客様との信頼関係を育んでいくことが大切と思って

います。

グローバルという言葉が、盛んに聞こえるようになりましたが、Hondaは、早くから需要のあるところで生産し、販売するという姿勢を一貫してきました。その地域のお客様の声に耳を傾け、最適な商品を開発、生産、販売し、世界中でお客様の喜びを創造し、喜びの輪を拡大していくことを今後も積極的に進めていきます。

それでは、お客様の満足を最大化するためには、いったい何をしたらいいのか。わたしが社長に就任して以来、「志」、「技」、「質」を高め、「研究・開発現場」「製造現場」「営業現場」「日本のマザー機能」の四つの領域で源流強化を行ない、「Hondaらしさ」をさらに強めていきたいと言い続けています。製造業であるHondaにとって何よりも求められるのは、技術力と仕事の質の高さであり、そして、それを支えるのは高い志をもったヒトです。これを更に高めていくことで「Hondaブランド」を際立たせていきます。

お客様の要望も実に多様です。それに応え、ブレークスルーできるのは、まさに新しい技術といえます。Hondaは、「モビリティ」の世界で技術を磨き、先進の価値を創造していきます。二輪、四輪はもとより、汎用製品、航空機、二足歩行ロボットのASHIMOもモビリティと考え、市販製品の研究・開発のみならず、広範囲に先進技術の研究を続けています。

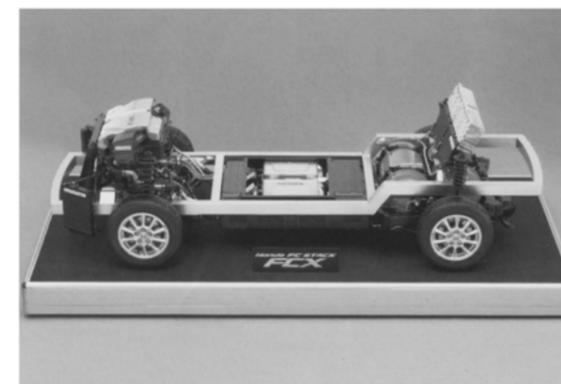


Honda FC STACK 搭載 FCX

時代の要請である環境対応についてですが、燃料に関しても現在のように化石燃料に頼るだけでは、決して未来は拓けません。ガソリン内燃機関の熱効率に限界もありますから、更に効率の良い圧縮着火のディーゼルエンジンも研究・開発しています。車全体としての安全性を損なわないで軽量化を行なうことや、空力技術、ハイブリッドのブレーキ回生技術など、さらに効率化を高める研究も続けています。

Hondaはかねてより、化石燃料の代替、排出ガスの削減、地球温暖化への影響低減という観点より、燃料電池を次世代の究極的クリーンパワープラントととらえ、積極的に開発に取り組んでいます。日本や北米西部地区で燃料電池車「FCX」のリース販売を行なっていますが、近く米国東部でもリース販売を行なう予定です。今まで技術面で難題とされていた、氷点下での始動も既にクリアしました。

燃料電池のように循環エネルギーを動力源とする時代の到来は、インフラの整備も含めてまだ先が見えていませんが、燃料電池車の改良進化と合わせて、水素製造、利用システムの実験もHondaは進めています。昨



FCX パワープラントモデル

年実験稼働を開始した水素燃料供給とコージェネレーション機能をあわせたホーム・エネルギー・ステーションにも期待しています。このステーションは、天然ガスから水素を発生させ、タンクに蓄圧し、燃料電池車に充填して走らせることが可能です。更に熱と電力も供給できるというものです。また、2001年よりすでに実験稼働している太陽電池式水電解型水素ステーションは、ソーラーパネルを利用して太陽光エネルギーから発電を行ない、水から水素を取り出し、同様に燃料電池車に供給することができるというものです。これらの2つの異なる水素製造、利用システムの実験を進めながら、将来の水素社会の対応を模索しています。

一般の家庭にこうした水素製造、利用システムを導入して、全てが賄えるようになるまでにはまだまだ時間を有すると思いますが、研究を続けて、技術だけでもブレークスルーを行なうべく努力を重ねています。

今後も世界中のお客様に向けた喜びの創造を実現するために、高い志でHondaはその難題を乗り越えていきます。Hondaの今後にご期待ください。

(文責 猪本義弘)



ホンダエネルギーステーション (HES) 外観



太陽電池式水素ステーション外観